



[花き部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

2. 夏秋小ギクの電照と再電照時期の制御による高品質切り花の9月需要期出荷技術

[要約]

夏秋小ギクの電照・9月出荷作型において、7月22日に消灯し、「はるか」では2～4日間、「すばる」では6～8日間の自然日長期間の後に再電照を8日間行うことで、高品質な切り花を9月の高需要期に出荷できる。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 野菜・花研究室

[連絡先] 電話 086-955-0277

[分類] 情報

[背景・ねらい]

夏秋小ギクの電照抑制栽培において、再電照によって上位側枝の花蕾数を増加させることが可能であるが、再電照を行うと開花が遅延する。そこで、電照・9月出荷作型において、再電照時期の制御によって上位側枝の花蕾数を増加させつつ、高需要期に開花させる技術の実用性を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 電照・9月出荷作型において、7月22日に消灯し、「はるか」では2～4日間、「すばる」では6～8日間の自然日長期間の後に再電照を8日間行くと、上位（第1～6）側枝の花蕾数が増加する（図1）。
2. このときの開花日は、7月22日消灯、無再電照の場合に比べて「はるか」では5日程度、「すばる」では9日程度遅延し、8月1日消灯、無再電照の場合に比べて「はるか」では同程度、「すばる」では3日程度遅延し、両品種とも、高需要期である9月中旬になる（図2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 岡山県赤磐市で、6月上旬に定植し、定植時から白熱電球で電照を行った結果である。
2. 再電照は、白熱電球を用いて、深夜4時間（22時～2時）の暗期中断とする。
3. 8月1日に消灯し、無再電照とするのが、農業研究所における、これまでの標準的な9月需要期出荷技術である。
4. 消灯日や栽培地によって花蕾数増加効果が高い自然日長期間は異なる。



[具体的データ]

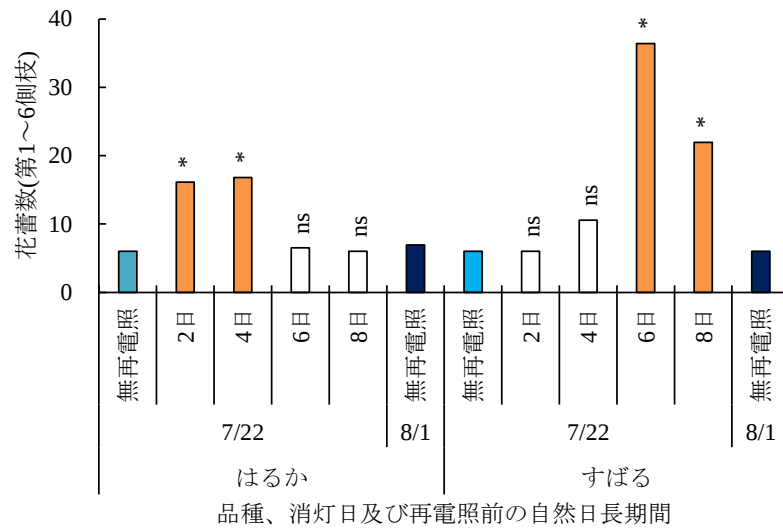


図1 9月出荷作型における再電照前の自然日長期間が「はるか」及び「すばる」の花蕾数に及ぼす影響
*、nsは7月22日消灯・無再電照区との有意差あり、なしを示す（Dunnett法、5%）

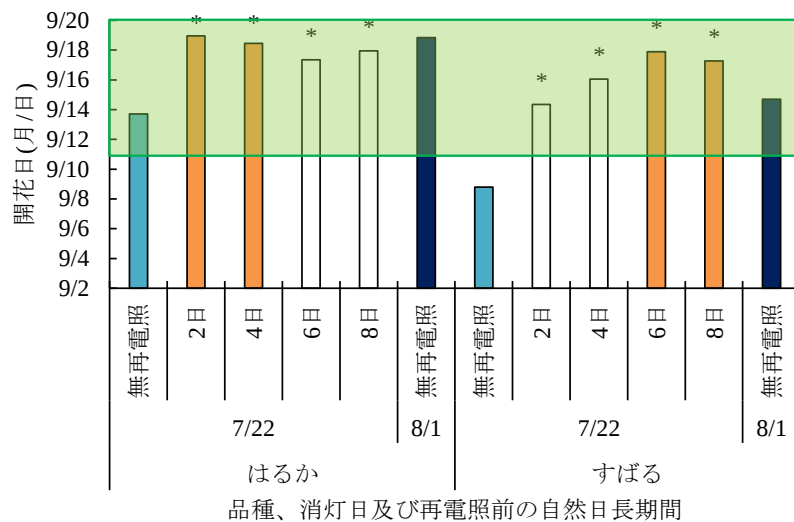


図2 9月出荷作型における再電照前の自然日長期間が「はるか」及び「すばる」の開花日に及ぼす影響
塗りつぶし部分は高需要期
*は7月22日消灯・無再電照区との有意差ありを示す（Dunnett法、5%）

[その他]

研究課題名：周年安定生産を可能とする花き栽培技術の実証研究

予算区分：受託（農林水産省プロジェクト研究「食料生産地域再生のための先端技術展開事業」）

研究期間：2013～2017年度

研究担当者：森義雄、笠原有加

関連情報等：1) [平成27年度試験研究主要成果、95-96](#)

2) Mori et al. (2016) Hort. J., 85:264-271

3) 平成29年度試験研究主要成果、43-44